

◎ 指示があるまで開かないこと。

(平成14年3月17日 14時30分～16時55分)

注 意 事 項

1. 試験問題の数は50問で解答時間は正味2時間25分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。
 - (1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101 県庁所在地はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

正解は「c」であるから答案用紙の

- 101 a b c d e のうち c をマークして
101 a b c d e とすればよい。

- (2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。
 良い解答の例……  (濃くマークすること。)
 悪い解答の例……   (解答したことにならない。)
- (3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。
- (4) 1間に二つ以上解答した場合は誤りとする。
- (5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 62歳の男性。健康診断で進行胃癌が発見された。58歳の妻、32歳の長男および28歳の長女と同居している。長男は自営業、長女は医師である。

この患者の治療の選択で決定権が最優先されるのはどれか。

- a 主治医
- b 患者本人
- c 患者の妻
- d 患者の長男
- e 患者の長女

2 28歳の女性。不眠を主訴として母親に伴われて来院した。

対応について正しいのはどれか。

- a 職業を尋ねてはいけない。
- b 母親からの患者情報は参考にしない。
- c 身体診察はしない。
- d 患者とともに治療方針を決める。
- e 次回の診察日を一方的に決める。

3 42歳の男性。糖尿病のため通院治療中である。治療は食事療法と運動療法であるが、血糖値の改善が思わしくない。患者はこれまで健康な生活リズムを心掛け、健康に自信を持っていたのによくならないでショックを受けている。また、医師から糖尿病とその合併症とについて説明され、よく理解しているが、食事療法が守られていない。

医師患者関係づくりに好ましくないのはどれか。

- a これまでの患者の健康生活リズムに共感する。
- b 患者と協力しながら治療していくことを話し合う。
- c 患者の糖尿病に対する考え方を確認する。
- d 患者の健康に関する価値観を理解する。
- e 来院のたびに合併症の怖さを強調する。

4 42歳の男性。生来健康であったが、前日夜から高熱、咳および喀痰が生じたため来院した。意識は清明。体温39.0°C。呼吸数22/分。脈拍98/分、整。血圧128/76mmHg。心雜音はない。喀痰は膿性。血液所見：赤血球470万、Hb15.6g/dl、白血球12,800。胸部エックス線写真で右下肺野に浸潤影を認める。

正しいのはどれか。

- a 直ちに喀痰のGram染色検査を行う。
- b 直ちに胃液で抗酸菌を培養する。
- c 直ちに抗菌薬を投与する。
- d 咳痰培養は治療開始後に実施する。
- e 起因菌が同定されるまで治療開始を待つ。

5 24歳の女性。1週前から両手足の先がしびれてきたので来院した。四肢遠位部の表在感覚と深部感覚との低下および四肢深部腱反射の低下を認める。

病変部位はどれか。

- a 大脳皮質
- b 視床
- c 脊髄後索
- d 脊髄視床路
- e 末梢神経

6 7か月の乳児。発熱とけいれんを主訴に救急車で来院した。午前中は哺乳力も機嫌も良かったが、昼過ぎに発熱に気付かれた。午後3時ころ急にけいれんを起こした。けいれんは、左右対称の強直性間代性で、持続時間はおよそ5分であった。これまでにけいれんの既往はなく、また今回が生まれて初めての高熱である。意識は清明。身長71cm、体重8.6kg。体温38.6°C。皮膚緊張度正常。咽頭は軽度発赤している。呼吸音は正常。鼓膜の発赤はない。大泉門2×2cm、平坦。Kernig徵候陰性。尿所見異常なし。白血球9,500。

この患児に対する適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 輸液
- c 抗菌薬投与
- d 抗けいれん薬投与
- e 副腎皮質ステロイド薬投与

7 67歳の男性。腹部のしこりを主訴として来院した。2年前から腹部のしこりに気付いていた。最近これが大きくなり、腹部膨満感も出現した。触診上腫瘍は拍動性である。腹部の写真(別冊No. 1)を別に示す。

この患者の診断に有用なのはどれか。

- a 尿検査
- b 血液検査
- c 腹部超音波検査
- d 上部消化管内視鏡検査
- e 腫瘍穿刺

別冊

No. 1 写真

8 60歳の男性。物忘れを主訴に家族に伴われて来院した。1年前から物忘れを訴えていたが徐々に増悪し、最近では大事な約束を忘れたり物の置き忘れが目立つ。診察時、意識は清明で病歴聴取にも協力的であるが、学歴や職歴など患者自身に関する質問に対して想起できなかったり誤りが目立つ。

この患者の記憶力を調べるのに適切な問い合わせはどれか。

- a 「今日は何月何日ですか。」
- b 「りんごとみかんの類似点は何ですか。」
- c 「日本の首都是どこですか。」
- d 「100から7を引いてください。」
- e 「これから言う数字を逆から言ってください。2-8-6。」

9 55歳の男性。人間ドックで眼底の異常を指摘され来院した。左の眼底写真(別冊No. 2)を別に示す。右眼も同様の所見である。

考えられるのはどれか。

- a 脳腫瘍
- b 糖尿病
- c 高脂(質)血症
- d 鉄欠乏性貧血
- e 甲状腺機能低下症

別冊
No. 2 写 真



10 25歳の男性。倦怠感を訴えて、夜8時ころ来院した。生来健康であったが、最近1か月は毎日3~4時間の超過勤務を行っているという。食欲は旺盛で、便通に異常はない。身体診察では特に異常所見はなく、血球検査と尿検査とに異常所見がない。血清生化学検査は時間外のためにできないので、血液を全血の状態で冷蔵庫に保存した。

翌日遠心分離して検査を行うと患者の本来の値より著しい高値を示すのはどれか。

- a ナトリウム
- b カリウム
- c クロール
- d カルシウム
- e 煙

11 63歳の女性。今朝から歩行困難が出現したため来院した。5年前に心臓ペースメーカー植え込み術を受けている。意識は清明。脈拍80/分、整。血圧156/84mmHg。項部硬直は認めない。左半身の不全片麻痺と感覺鈍麻とを認める。

まず行うべき検査はどれか。

- a 脳波
- b 髄液検査
- c 頭部単純CT
- d 頭部単純MRI
- e 脳血管造影

12 42歳の男性。最近仕事が忙しく、食事が不規則になり、体重も減ってきた。他院で膵癌の疑いがあるといわれたので、検査データを持ってセカンドオピニオンを求めて来院した。CA19-9のみ上昇していた。CA19-9の膵癌検出の感度50%、特異度75%であり、この患者での膵癌の検査前確率を10%と仮定する。

CA19-9の上昇を考慮した検査後確率はどれか。

- a 18%
- b 36%
- c 54%
- d 72%
- e 90%

13 600床の病院の外来を1か月間に受診した胸痛患者70名中20名が急性心筋梗塞であった。同じ地域の無床診療所を同じ1か月間に受診した胸痛患者20名中、急性心筋梗塞の患者は1名であった。特定の施設の患者データから地域全体の疾患頻度を推定することによって生じる誤りを表す用語はどれか。

- a 特異度
- b 検査後確率
- c 費用効果性
- d ROC曲線
- e バイアス

14 62歳の女性。朝食前に夫と散歩中、冷汗と動悸とを訴え、間もなく意識が混濁し救急車で搬入された。5年前から糖尿病治療のため経口血糖降下薬を服用している。来院時、意識は傾眠状態。体温36.5°C。呼吸数16/分。脈拍98/分、整。血圧152/70mmHg。発汗が著明である。四肢に明らかな麻痺はない。

検査結果が出るまでの緊急処置として適切なのはどれか。

- a 降圧薬の投与
- b ブドウ糖液の静注
- c ニトログリセリンの舌下投与
- d インスリンの静注
- e 生理食塩液の静注

15 14歳の男子。2時間前に化学薬品が右眼に飛入し、眼痛を訴えて来院した。眼痛が激しく開瞼が困難であったため表面麻酔薬を点眼した。

次に行うべき処置はどれか。

- a 生理食塩液で洗浄(洗眼)
- b エタノールで洗浄(洗眼)
- c 緩瞳薬点眼
- d 抗菌薬点眼
- e 副腎皮質ステロイド薬点眼

16 72歳の男性。3年前から左足底に皮疹が出現し、徐々に拡大してきたため来院した。左足底の写真(別冊 No. 3 A)と病理組織H-E染色標本(別冊 No. 3 B)とを別に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 褥瘡
- b 色素性母斑
- c café au lait 斑
- d 有棘細胞癌
- e 悪性黒色腫

別冊
No. 3 写真A、B

17 1歳2か月の女児。2日前から感冒気味であった。夕方から左耳痛と発熱があり来院した。左鼓膜写真(別冊 No. 4)を別に示す。

適切な治療はどれか。

- a 酸素療法
- b 輸液療法
- c 温熱療法
- d 耳管通気
- e 鼓膜切開

別冊
No. 4 写真

18 52歳の男性。強い胸痛のため救急車で来院した。今朝4時ころ胸部圧迫感が出現した。横になり朝まで我慢していたが、胸痛はますます強くなり、冷汗と嘔吐とを伴うようになった。脈拍68/分、整。血圧110/80 mmHg。肺野に coarse crackles (湿性ラ音)を聴取する。来院直後の心電図(別冊 No. 5)を別に示す。

- 診断に有用な検査はどれか。
- a 血清クレアチニーゼ測定
 - b 呼吸機能
 - c 運動負荷心電図
 - d 上部消化管内視鏡
 - e 胸部造影CT

別冊
No. 5 図

19 24歳の男性。下腹部痛と下痢とを主訴に来院した。2年前から下痢便の排出で軽快する下腹部痛が繰り返し生じ、近医で治療を受けていた。3か月前から転勤に伴い更に症状が悪化したため、他院で注腸造影と下部消化管内視鏡検査とを受け器質的異常はないと言われた。

- この病態の診断に最も有用なのはどれか。
- a 患者背景の聴取
 - b 便の細菌培養
 - c 血清電解質検査
 - d 腫瘍マーカー測定
 - e 腹部単純CT

20 7か月の乳児。嘔吐と白色下痢とを主訴に来院した。昨夕、38.7°Cの発熱があり、嘔吐7回と白色水様下痢12回とがみられた。今朝から元気がなく、うとうとするようになった。意識は傾眠状である。体重7,500g。体温38.6°C。脈拍130/分、整、微弱。四肢に冷感がある。皮膚は乾燥し、緊張度は中等度に低下している。1週前の体重は8,350gであった。

脱水の重症度判定に最も重要な指標はどれか。

- a 発熱の有無
- b 嘔吐の回数
- c 下痢の回数
- d 皮膚診察所見
- e 体重減少の程度

21 54歳の男性。7か月前からの後頭部を中心とした頭重感のため来院した。来院前に職場の診療所を受診し鎮痛薬を処方されたが、症状はさほど改善せず、出勤がおっくうな日もある。食欲がなく、熟睡した感じがないと訴えている。意識は清明。体温36.8°C。脈拍62/分、整。血圧108/72mmHg。項部硬直はない。眼底に異常所見はない。

最も考えられるのはどれか。

- a くも膜下出血
- b 無菌性髄膜炎
- c 脳膜瘻
- d 甲状腺機能亢進症
- e うつ状態

22 25歳の男性。突然に起る胸痛、頻脈およびめまいを繰り返し、動悸性高血圧もあるため紹介され内科に入院した。心筋逸脱酵素などの血液検査、心電図検査、心エコー検査およびトレッドミル検査を受けたが異常はなかった。褐色細胞腫、カルチノイド、低血糖、甲状腺疾患等について検査を受けたが異常は見い出されなかつた。

この患者に対する適切な対応はどれか。

- a 病気はないと言って退院させる。
- b 三次医療機関に紹介する。
- c 不安障害の可能性を検討する。
- d 降圧薬を投与する。
- e ニトログリセリンを投与する。

23 18歳の男子。全身けいれん発作が短かい間隔で次々と反復して、1時間以上続くため、救急車で搬入された。診察時、失見当識、記憶力減弱を認め、意識は混濁している。体温37.0°C。呼吸数16/分。脈拍72/分、整。血圧130/70mmHg。診察中、突然、強直性間代性の全身けいれん発作が再出現した。

この患者に対する適切な処置はどれか。

- a 心マッサージ
- b 副腎皮質ステロイド薬投与
- c 電気けいれん療法
- d ジアゼパム静注
- e 低体温療法

24 38歳の男性。3日前から発熱と咽頭痛とを自覚していた。夕刻から嚥下痛が増悪し、摂食困難となり、呼吸困難も出現したため、救急車で来院した。体温39.2°C。脈拍100/分、整。血圧154/92 mmHg。胸腹部に異常を認めないが、喘鳴があり起坐呼吸の状態である。頸部に腫瘍は触知しない。喉頭ファイバースコープ写真(別冊No. 6)を別に示す。

この患者への最も適切な対応はどれか。

- a 輸液
- b 鎮痛薬投与
- c 胃管挿入
- d 嚥下訓練
- e 気道確保

別冊
No. 6 写真

25 5か月の乳児。昨夜から不機嫌で、哺乳量が少なく、今朝から4、5回嘔吐したため来院した。うとうとしており、おむつ交換時に啼泣する。体温39°C。脈拍140/分、整。顔色不良で、口唇は潮紅し、咽頭が軽度発赤している。腹部は平坦、軟である。神経学的に項部硬直とKernig徵候とを認める。

診断する上で最も重要な所見はどれか。

- a 大泉門膨隆
- b 対光反射遅延
- c 頸部リンパ節腫脹
- d 肝脾腫
- e 深部腱反射減弱

26 23歳の女性。1か月前から頸部、肩および上腕の痛みとしびれとを自覚し、増悪したため来院した。1年前からワープロによる文書作成に従事している。身長155cm、体重45kg。脈拍74/分、整。血圧100/64 mmHg。手指の感覚障害はなく、神経学的診察で特に異常を認めない。

この患者への適切な対応はどれか。

- a 作業条件の改善
- b 副腎皮質ステロイド薬投与
- c 頸椎装具装着
- d 神経ブロック
- e 手術療法

27 78歳の男性。上腹部から前胸部にかけての重圧感を訴えて、無床診療所を独歩で受診した。同症状は6時間前から出現し、冷汗を伴い、和らぐことなく続いた。胸部の聴診ではcoarse crackles(水泡音)を聴取する。心電図で、I、_aV_L及びV_{4~6}誘導にSTの上昇を認めたため、直ちに救急処置を行った。

引き続いて行う対応で最も緊急度の低いのはどれか。

- a 転送先の手配
- b 家族への連絡
- c 紹介状の作成
- d 診断書の作成
- e 救急隊への搬送要請

28 56歳の男性。町の健康診断で高血圧を指摘され来院した。特に自覚症状はない。入院歴はない。喫煙は20歳から1日30本である。飲酒も20歳から始め、この15年間は1日ビール大ビン1本と日本酒2合とを飲む。血圧140/88mmHg。尿所見：蛋白（-）、糖（-）。血清生化学所見：空腹時血糖123mg/dl、総コレステロール218mg/dl、γ-GTP100単位（基準8～50）。

この患者への対応で誤っているのはどれか。

- a 自宅安静が必要であることを説明する。
- b 経過観察が必要であることを説明する。
- c 節酒指導を行う。
- d 禁煙指導を行う。
- e ブドウ糖負荷試験を予約する。

29 65歳の女性。肝硬変と食道静脈瘤との治療のために入院中である。入院20日目、3度目の食道静脈瘤の硬化療法を受けたころから徐々に言葉数が減少し、ベッドから離れる回数も減り、笑顔もみられなくなってきた。しかし、肝硬変の状態は安定し、硬化療法の治療経過も順調である。

この患者への対応で誤っているのはどれか。

- a 現在の治療は順調であることをよく説明する。
- b 患者の話をよく聞く。
- c 抑うつ気分の有無を尋ねる。
- d 希死念慮の有無について尋ねる。
- e 病室への訪問回数を減らす。

30 62歳の男性。腰痛と膝関節痛とのため定期的に通院している。ある日の予約外来での担当医との会話を以下に示す。

医師 「Aさん、こんにちは。調子はどうですか。」

患者 「あまりよくないね。いったいこの病院の駐車場ではどこに車を停めることになっているんだ。駐車スペースを見つけるまで3回もぐるぐる駐車場を回られたよ。それで遅れたんだ。私のように足腰が悪い者に対して何て不親切なんだ。」

この患者への対応として最も適切なのはどれか。

- a 「そうですか。ところで膝の痛みはどうですか。」
- b 「まあそんなに怒らなくても……。」
- c 「そんなことは私の知ったことではありませんよ。」
- d 「そうですか、駐車スペースを探し回って大変だったんですね。」
- e 「これからはもっと早く来ることですね。」

次の文を読み、31、32の問い合わせに答えよ。

41歳の1回経産婦。無月経を主訴に来院した。

現病歴：最終月経は2か月前であった。数日前に市販の妊娠反応試薬で陽性を確認した。

既往歴：前回の分娩は5年前。正常分娩で、母子ともに異常はなかった。他に特記すべきことはない。

現症：身長158cm、体重52kg。体温36.7℃。脈拍84/分、整。血圧128/70mmHg。内診所見で子宮は鶯卵大に増大して軟、圧痛はない。両側付属器も触知しない。経腔超音波検査で子宮内に胎嚢を認める。

31 この妊娠で頻度の高い児の異常はどれか。

- a 染色体異常
- b 無脳児
- c 巨大児
- d 不整脈
- e 黄疸

32 この児の異常の有無について検査を行うことを決定できるのはどれか。

- a 夫婦
- b 夫婦の両親
- c 主治医
- d 複数の医師
- e 遺伝専門医

次の文を読み、33、34の問い合わせに答えよ。

26歳の女性。外来での医療面接で次のような対話があった。

医師 「今日はどんなことでおいでになりましたか。」

患者 「みぞおちが痛むものですから診てもらいたくて来ました。」

医師 「では、もう少し詳しく話して下さい。」

患者 「ええ、2週前から時々みぞおちが痛くなってきて、おかしいなと思っていたのですが、1週前からは毎日のように痛みだしました。市販の薬を飲んだときはよいのですが、また悪くなるのでよく診てもらいたくてやってきました。」

医師① 「〇〇〇〇。」

(中 略)

医師 「みぞおちが痛むときに吐き気などはありますか。」

患者 「ええ、痛みがひどいと吐き気がします。」

医師 「吐きますか。」

患者 「ええ、ときにはもどします。」

医師② 「それは大変ですね。」

33 医師①の発言で情報が得られやすいのはどれか。

- a 「それはちくちくする痛みですか。」
- b 「他に何か症状はありますか。」
- c 「そうですか。ではどんな痛みなのか詳しく教えて下さい。」
- d 「じゃー、これまでにどんな病気をしましたか。」
- e 「家族の方で病気をした人がいますか。」

34 医師②の対応に相当するのはどれか。

- a 評価的態度
- b 解釈的態度
- c 中立的態度
- d 共感的態度
- e 支持的態度

次の文を読み、35、36の問い合わせに答えよ。

72歳の男性。体動時の息切れと動悸とを主訴にかかりつけ医から紹介されて、救急車で来院した。

現病歴：数年来3日に1行の排便習慣であり、時々新鮮血が便に付着していたが、最近付着する頻度が増え残便感を自覚するようになった。易疲労感を自覚していたが、1週前から下血を繰り返し、体動時の息切れと動悸とが出現した。

既往歴：特記すべきことはない。

前医で行った1か月前の検査所見：血液所見：赤血球392万、Hb 9.6 g/dl、Ht 28%、白血球4,000、血小板40万。血清生化学所見：総蛋白6.6 g/dl、アルブミン3.6 g/dl、尿素窒素16 mg/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、総コレステロール192 mg/dl、総ビリルビン0.8 mg/dl、AST(GOT)40単位(基準40以下)、ALT(GPT)32単位(基準35以下)、Na 137 mEq/l、K 4.0 mEq/l、Cl 100 mEq/l。

現症：意識は清明。体温36.8°C。脈拍110/分、整。仰臥位血圧110/80 mmHg。坐位血圧92/60 mmHg。眼瞼結膜は貧血様で眼球結膜に黄疸を認めない。心尖部に2/6度の収縮期雜音を聴取する。

35 この患者で認められる可能性が高い身体所見はどれか。

- a 肋骨脊柱角部叩打痛
- b Blumberg 徴候
- c 腹部筋性防御
- d 腸雜音消失
- e 直腸腫瘍触知

36 来院時の緊急血液検査でHb 6.2 g/dlであった。この患者に輸血を実施するに当たって適切でない対応はどれか。

- a 使用する輸血の種類と量について説明する。
- b 改善が見込まれる症状について説明する。
- c 実施しなかった場合の危険性について説明する。
- d 副作用について説明する。
- e 同意なしで実施する。

次の文を読み、37、38の問い合わせに答えよ。

18歳の男子。昨夜から喘鳴を伴う呼吸困難があり、今朝から意識混濁が出現したため救急車で搬入された。

現 症： 意識JCS 20。体温37.6℃。呼吸数30/分。脈拍140/分、整。血圧130/92mmHg。努力性胸式呼吸で呼気の延長が著明である。口唇と爪床とにチアノーゼを認める。貧血と黄疸とはない。肺野は呼気時に喘鳴がある。心音は肺動脈領域でⅡ音の亢進が認められる。腹部は平坦、軟で圧痛はない。

検査所見： 血液所見：赤血球518万、Hb 16.3g/dl、Ht 49%、白血球13,600、血小板33万。血清生化学所見：血糖138mg/dl、総蛋白7.5g/dl、クレアチニン1.0mg/dl、総ビリルビン1.0mg/dl、AST(GOT)35単位(基準40以下)、ALT(GPT)31単位(基準35以下)、LDH 183単位(基準176～353)、CK 70単位(基準10～40)。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.00、PaO₂ 37Torr、PaCO₂ 67Torr、HCO₃⁻ 17mEq/l、BE -7.7 mEq/l。胸部エックス線写真で心拡大はない。

37 この患者にとらせるべき体位はどれか。

- a 仰臥位
- b 腹臥位
- c 膝胸位
- d 起坐位
- e ショック体位

38 救急処置で適切でないのはどれか。

- a 酸素投与
- b 気管内挿管
- c 気管支拡張薬投与
- d エピネフリン投与
- e ニトログリセリン投与

次の文を読み、39、40の問い合わせに答えよ。

72歳の男性。歩行時に息苦しさが強くなってきたので来院した。

現病歴：半年前から坂道を登るときに息が苦しくなり、最近では平坦な道を歩くときも苦しくなってきた。長時間の歩行は困難で休みながらでないと歩けない状態である。咳や痰を自覚することは少ない。

嗜好：喫煙は30本/日を50年間であったが、半年前から禁煙している。

現症：身長172cm、体重54kg。呼吸数18/分。脈拍86/分、整。血圧136/80mmHg。頸静脈の怒張はない。胸郭はビア樽状を呈する。腹部は平坦で肝を触知しない。下肢に浮腫を認めない。

検査所見：尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤沈36mm/1時間、赤血球485万、Hb14.5g/dl。血清生化学所見：総蛋白6.8g/dl、アルブミン3.8g/dl、AST(GOT)18単位(基準40以下)、ALT(GPT)16単位(基準35以下)、LDH360単位(基準176~353)。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：PaO₂55Torr、PaCO₂43Torr。スパイロメトリ：VC3,100ml、%VC100%、FEV_{1.0}%39%。胸部エックス線写真で肺の過膨張、横隔膜の平低化および滴状心を認める。

39 この患者にみられる胸部の身体所見はどれか。

- a 心尖拍動の左方偏位
- b 肺肝境界の上昇
- c 呼気延長
- d 片側の呼吸音消失
- e 拡張期心雜音

40 適切な治療はどれか。

- a 副腎皮質ステロイド薬投与
- b 在宅中心静脉栄養法
- c 在宅酸素療法
- d 在宅人工呼吸
- e 肺移植

次の文を読み、41、42の問い合わせに答えよ。

65歳の男性。吐血のため救急車で来院した。

現病歴：2日前から風邪気味で感冒薬を服用していた。今朝、突然嘔気があり洗面器一杯の新鮮血液を吐血した。

既往歴：25年前に胃切除術の際に輸血を受けた。数年前から肝硬変を指摘されていた。

現症：身長165cm、体重61kg。体温36.6℃。脈拍120/分、微弱、整。血圧72/40mmHg。皮膚は蒼白で頸部にクモ状血管腫がみられる。眼瞼結膜に著明な貧血を認め、眼球結膜に黄疸を認める。胸部所見では心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は軽度膨隆し、肝・脾は触知しない。

41 直ちに行うべきことはどれか。

- a 静脈路確保
- b 気道確保
- c 胃管挿入
- d 上部消化管造影
- e 腹腔穿刺

42 緊急検査を行って次の結果を得た。尿所見：蛋白(−)、糖(−)、ウロビリノゲン(±)、ビリルビン(+)。血液所見：赤血球210万、Hb 6.0 g/dl、Ht 20%、白血球2,800、血小板8万。心電図は洞性頻脈を示している。

適切な治療はどれか。

- a エピネフリン投与
- b ニトログリセリン投与
- c 塩酸モルヒネ投与
- d ヘパリン投与
- e 輸血

次の文を読み、43、44の問い合わせに答えよ。

44歳の男性。右下腹部の痛みと嘔吐とで来院した。

現病歴： 昨日海水浴を楽しんで帰宅した。今朝4時ころ突然、腹痛で目覚めた。

痛みは右側腹部から右下腹部まで拡がり、右陰嚢部にも放散した。嘔気を我慢できず、透明な胃液を少量嘔吐した。吐血や黒色便は認めず、心窩部痛もない。

既往歴： 30歳から高尿酸血症を指摘されているが、治療歴はない。

現 症： 意識は清明。身長165cm、体重78kg。体温37.1℃。脈拍76/分、整。

血圧146/90mmHg。腹部は平坦で、肝・脾は触知しない。外陰部は正常で、陰嚢内容に触診上異常所見はない。

検査所見： 尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血2+。血液所見：赤血球560万、Hb 15g/dl、Ht 48%、白血球9,500、血小板35万、プロトロンビン時間(PT)12秒(基準10~14)。血清生化学所見：総蛋白7.8g/dl、アルブミン5.2g/dl、尿素窒素20mg/dl、クレアチニン1.2mg/dl、尿酸7.5mg/dl、総ビリルビン0.6mg/dl、AST(GOT)18単位(基準40以下)、ALT(GPT)16単位(基準35以下)、LDH 320単位(基準176~353)、Na 135mEq/l、K 4.2mEq/l、Cl 101mEq/l。腹部エックス線単純写真(別冊No.7)を別に示す。

別 冊

No. 7 写 真

43 この疾患でみられる身体所見はどれか。

- a 腹部波動
- b 腸雜音亢進
- c 腹部血管雜音
- d Blumberg 徴候
- e 肋骨脊柱角部叩打痛

44 この疾患の診断に有用でないのはどれか。

- a 尿沈渣
- b 腹部超音波検査
- c 腹部単純CT
- d 静脈性尿路造影
- e 上部消化管造影

次の文を読み、45、46の問い合わせに答えよ。

24歳の女性。動悸と易疲労感とを主訴に来院した。

現病歴：半年前から動悸と易疲労感とが出現した。不安もみられるため抗不安薬を投与されていたが、症状は改善せず、1か月前から悪化した。この間に体重は10kg減少した。

既往歴・家族歴：特記すべきことはない。

現症：身長158cm、体重41kg。体温37.2°C。脈拍92/分、整。血圧136/60mmHg。眼球突出を認める。甲状腺は軟らかく、びまん性に腫大しているが、自発痛と圧痛ではない。心音に異常なく、呼吸音は清。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。

検査所見：血液所見：赤沈11mm/1時間、白血球4,100。血清生化学所見：総蛋白6.9g/dl、アルブミン4.6g/dl、総コレステロール108mg/dl、Na142mEq/l、K3.4mEq/l。TSH0.01μU/ml未満(基準0.2~4.0)、free T₄7.3ng/dl(基準0.8~2.2)。

45 この疾患にみられるのはどれか。

- a 便秘
- b 嘎声
- c 食欲不振
- d 手指振戦
- e 皮膚乾燥

46 この患者の治療薬で適切なのはどれか。

- a α受容体遮断薬
- b カルシウム拮抗薬
- c 抗甲状腺薬
- d 非ステロイド性抗炎症薬
- e 副腎皮質ステロイド薬

次の文を読み、47、48の問い合わせに答えよ。

72歳の女性。市町村の老人健康診査を受けに来た。

現病歴： 5年前から一人暮らしであるが、日常生活に支障はない。3年前から高血圧症と高脂血症とを指摘されているが、この1年間は治療を受けていない。外出に支障はないが、近所付き合いはあまりしていない。

既往歴： 特記すべきことはない。

健康診査結果： 血圧 164/96 mmHg。血清総コレステロール 250 mg/dl、血清トリグリセライド 200 mg/dl(基準 50~130)。

47 この患者に適応とならないのはどれか。

- a 介護保険
- b 医療機関受診
- c 健康相談
- d 患者教育
- e 訪問指導

48 この患者に生活支援を行う上で必要ないのはどれか。

- a 保健師(保健婦)の指導
- b 健康意欲の向上
- c 食生活の改善
- d 身体の安静
- e 社会参加

次の文を読み、49、50の問い合わせに答えよ。

58歳の女性。腰背部の激痛を訴え、家族に付き添われ来院した。

現病歴：慢性関節リウマチで15年間治療中であり、5年前に右膝人工関節置換術を受け、現在は少量の副腎皮質ステロイド薬と非ステロイド性抗炎症薬を中心服用中である。特に誘因なく4日前から増悪する腰背部痛を自覚した。

既往歴：特記すべきことはない。

現症：身長154cm、体重46kg。円背があり、胸腰移行部に強い自発痛と叩打痛があり、坐位保持は30分間が限度である。神経学的には明らかな脊髄症状はみられない。手指変形と多発性関節痛がある。屋内は伝い歩きが可能であるが、屋外歩行は困難である。

検査所見：胸腰椎エックス線単純撮影で第7、8、9及び12胸椎に圧迫骨折が認められる。

経過：以上の所見から入院となった。体幹装具を作製し、歩行訓練を始め、杖歩行が可能となった。4週経過し退院準備中である。なお本人の自宅居室は1階にある。

退院前検査所見：血液所見：赤血球370万、Hb 10.5g/dl、白血球6,000。血清生化学所見：総蛋白5.8g/dl、アルブミン3.5g/dl。CRP 2.3mg/dl(基準0.3以下)。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：PaO₂ 80Torr、PaCO₂ 40Torr。胸部エックス線写真で軽度の間質性肺炎の所見がみられる。

49 自宅への退院にあたり必要なのはどれか。

- a 住居新築
- b 安静臥床
- c 在宅酸素療法
- d 電動車椅子使用
- e 日常生活動作指導

50 この患者で今後注意すべき疾患はどれか。

- a 脳梗塞
- b 肝硬変
- c 胃潰瘍
- d 自然気胸
- e 心筋梗塞

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)